とんぼのめがね

あきつ松風通信 第205号
2024. 3. 31. イースター礼拝

「エマオへの道で」（ルカ 24：13－35） 臼井 熟

「話し合ったり論じ合ったりしているところに、イエスご自身が近づいて来て、彼らとともに歩き始められた。しかし、二人の目はさえぎられていて、イエスであることが分らなかった。…それからイエスは、…ご自分について聖書全体に書いてあることを彼らに説き明かされた。…彼らが"一緒にお泊りください。そろそろ夕刻になりますし、日もすでに傾いています。"…そして彼らと食卓に着くと、イエスはパンを取って神をほめたたえ、裂いて彼らに渡された。すると彼らの目が開かれ、イエスだと分ったが、その姿は見えなくなった。二人は話し合った。"道々お話しくださる間、私たちに聖書を説き明かしてくださる間、私たちの心は内に燃えていたではないか。"二人はただちに立ち上がり、エルサレムに戻った。すると11人とその仲間が集って、"本当に主はよみがえって、シモンに姿を現された。"と話していた。」

今日の礼拝は、主イエス・キリストの復活を記念する"イースター礼拝"です。クリスマスをお祝いする掛け声は「メリー・クリスマス！」ですね。イースターは「ハッピー・イースター！」と言うようです。英語のmerry（メリー）は「楽しいとか、面白い」とか、何か心を浮き浮きと陽気にさせる意味で使われます。一方happy（ハピー）は、「幸福とか幸わせ」という、神に祝福されると云う意味がこめられた言葉です。クリスマスから、十字架の受難で終るイエスの実人生は、万人が「偉人、聖人」と認め、尊敬する意味がこめられていて、それはキリスト者でなくても、他宗教、無神論の人であっても、その生涯を「メリー」として寿ぐことが出来ます。しかし、人々をハッピーにさせるのは、その人を祝福に変える力がなければ成りません。人を真に幸福にするのは「福音の力」です。キリストの十字架を自分の罪の贖いと、神への背きと信じ、赦されたと云う確信を得たとしても、そのイエス・キリストも同じ人として死んで終ってしまうとしたら、その信仰の保証は無となってしまいます。キリストが、罪の結果である死に打ち勝った復活がなければ真の安心と幸福はあり得ません。物事の真実を突き詰める思考方法に「演繹」と「帰納」という二通りがあると言います。演繹とは、「真理とされる命題を経験によらず、論理の規則に従って、必然的な結論を導き出す思考の手段」です。例えば、「神は全知全能の創造者であることを前提とすれば、イエスをその神のひとり子と信ずれば、その死よりの復活は必然となります。」しかし、法律の場合、「この人が犯人に間違いない」と演繹的な決論がなされても、物的証拠が挙げられなければ、有罪にすることは出来ません。この証拠を集める作業が「帰納的方法」です。イエス・キリストの十字架までは、聖書以外の歴史的証言を集める帰納的方法によって、万人が、歴史的事実であることが認められています。しかし、主イエスの復活についての証言は、新約聖書以外にはなく、しかもすべての証言は、信者の証言です。ゆえに主の復活はキリスト者だけが祝うことが出来る祭日であります。僕は、いくつかある主の復活物語の中で、今日学ぶ「エマオへの道で」起った物語が一番好きです。人間が、主の復活を、どのようにして信じ、受け入れる者になるのか、その過程が実によく物語られている。正に科学的医師であり、実証的な歴史家でもあったルカによって書かれた、実に美しく感動的に、まるで紀行文のように記されています。エマオという村は、今日特定されていませんが、エルサレムから西方11キロの所と記されています。時刻は、早朝の最初に復活の主に逢ったマグダラのマリヤの時から半日が過ぎた、西に太陽が傾きかけた午後の時刻であります。すでに女性たちからの報せで知った弟子の

一人、クレオパともう一人の弟子がエルサレムから西のエマオへと出かけて行きます。クレオパは通称「クロパ」とも呼ばれ、伝承によれば、イエスの父ヨセフの兄弟と言われています。別の伝承では、このクロパの息子シメオンが、迫害で最初の殉教者になったエルサレム教会の代表ヤコブの後継者になったとも言われています。もう一人の弟子への推測は色々なされていますが、僕が最も好きな説は、それは彼の妻ではなかったかと云う説です。婦人が先ず最初に復活の主に会って、次にペテロ、そして他の弟子たち、それからガリラヤでの顕現においては男の弟子ばかりである。だから一組の夫婦か旅人と云うのが、女性を重じるルカに最もふさわしいことのように思えるが、どうであろうか？ そこへ見知らぬ旅人が、そっと寄り添うように加わります。決して押しつけがましい参入ではありません。私たちが復活の主に出逢うのは、無理矢押しつけではないのです。実に、すっと寄り添って下さるのです。彼らは、イエスがどんなに期待するメシアであり、希望の星であったを語り合い、その喪失の傷をお互いに慰め合っていたわけです。西陽が差して、逆光の中、見分けずらかったと云えますが、決して彼らは主の御顔を見忘れたはずがない。なぜ彼らは主と気付かなかったのでしょうか。絶望が彼らの脳の視力を不能にしてしまったのでしょう。僕にも経験がありますが、何かの想念に取りつかれていると、大きな建物などを見てもまったく気付かないことがあります。彼らが驚いたことに、その旅人が、つい三日前の都の大きな事件（イエスの十字架刑）を全く知らない事でした。
「あなただけが知らなかったの？」という質問に、そのことがこめられています。彼らは、自分らの絶望を吐露すると同時に、信じられない驚天動地の、今朝のニュース、主の復活の報せをその旅人に語ります。するとその旅人は、モーセや預言者のことばを全聖書に亘って記されている記事から引用し、来るべきメシア、イエス・キリストの受難と復活の預言を彼らに語ります。「ああ、愚かな人たち、心の鈍い人たち」と主イエスは、彼らの不信仰を諭ります。彼らは、この方は何とすごい知識を持ったラビだろうかと驚嘆しますが、それでも尚彼らの目には不信仰の鱗が付いたままです。復活の主はあくまで自然態でソフトなのです。強引に心の扉を叩こうとも、力まかせに開こうともなさらない。並通の行き掛りの旅人のように彼らの宿を通り過ぎようとなさいます。幸いな事に、主のみことばによって彼らの魂の内側を熱く燃やされた彼らは、そのまま行こうとする旅人の袖をつかんで、強引に宿って下さるよう引き留めます。そうなければ、主は行ってしまわれたことでしょう。彼らの意思と云うより、みことばに燃やされた彼らの魂の叫びが主を引き留めたのです。主はかつてガリラヤ湖畔で彼らに言われました。「求めよ、さらば与えられん、門を叩け、さらば開かれん」と。彼らは主に懇願したのです。「主よ、共に宿りませ」と。これを賛美歌にしたH.P.ライトが1847年に作った詩、218番「主よ共に宿りませ。(Abide with me)」皆さんの手元に英語の原文1、5番があります。味わってみましょう。主は宿に着くと、夕食になります。主は客人ではなく、主人としてパンを取り、それを裂いて、神に感謝して、彼らに渡します。その手を見て、彼らは、ガリラヤで主が5千人を養われた奇跡を思い出したのでしょうか、それとも主の手に釘の跡を見たのでしょうか、「あっ！主だ」と気付いた時、主の姿はもう消えていました。この場面に感動したもう一人の芸術家がこれを絵にしました。レンブラントの傑作です。
彼らが復活の主に目が開れたのは、主との会話の中ではなく、普段通りの生活の食事の作法の中であったのです。中にはパウロのように劇的な出会いの方もおられます。（のしたいがいは、この二人のように日常の生活の中に主の臨在を感じた時、復活の主に逢うのです。彼らは、はじめ陽が沈む西方に歩みましたが、復活の主に逢うや踵を返して、東方の夜明に向って戻って行き同じ経験を共有した仲間に会い、再び主に会ったのです。「いのちは恩寵のうちにある。夕暮れには涙が宿っても、朝明には喜びの叫びがある」（詩篇 30：5）